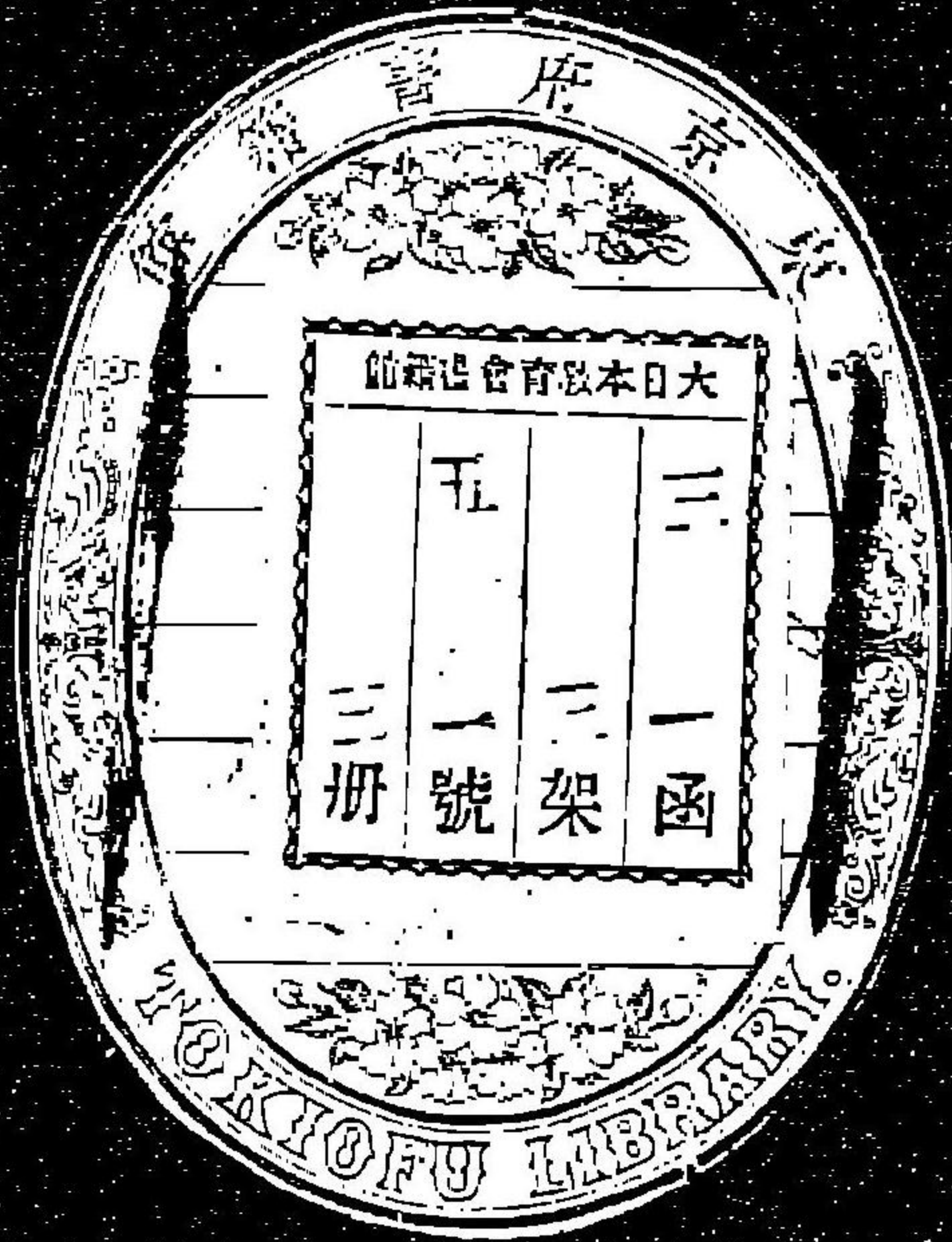


芳香余談 二葉廼風



50
641
共
三
本

102428-001-6

特38-641

二葉廼風 (芳香余談) 卷之1-3

瓜生 政和 / 編

M6

EAG-0296



持38
64i

瓜生先生著

芳香
餘談
一葉迺風

明治六年
仲夏新刺

錦森堂發行

題云

夫れ國は才俊雄傑ありて猶人身の血
榮氣力有りてのみならず人の一身血氣
力甚るる程も精神爽快なりて肢體康
強多し故に凡百事勲を於て敏捷を
きく如く之を國に於ては之れを
道義の心ありては精神の爽快あり

如く富庶の實を以て肢體の原強
なるを以て腹を養ひて胸を強
固き母の精神は其の興を以て
厚く其を以て和睦し天下を治す
富庶の實を以て是を治す
以て母の心を以て其の世を治す
よたに其の心を以て其の世を治す

於人身に病ありて其の源を
肢體拘束は其の源を以て其の
と其の源を以て其の源を以て其の
家の形勢を維持するに其の源を
其の源を以て其の源を以て其の
其の源を以て其の源を以て其の
其の源を以て其の源を以て其の

道長乃以序を撰らる人の至る所
或難條——序後を挽回して其終の
命終を保定はるる素より難事あり
序——後令は後難條——と有り
き——其死血の素弱をて其終に
枯葉福ふり——とありて其終の
又何の終——とありて其終の

法氣を多くす後難條を合趣はるる
なり世終——地邦の素弱を祥と
風流の言とありて是終は他人
乃終——其終をて其終ありて
願し前古に終編の素素をありて
自己乃分り——憤懣練磨をて其思
をて其終ありて其終の終業徒

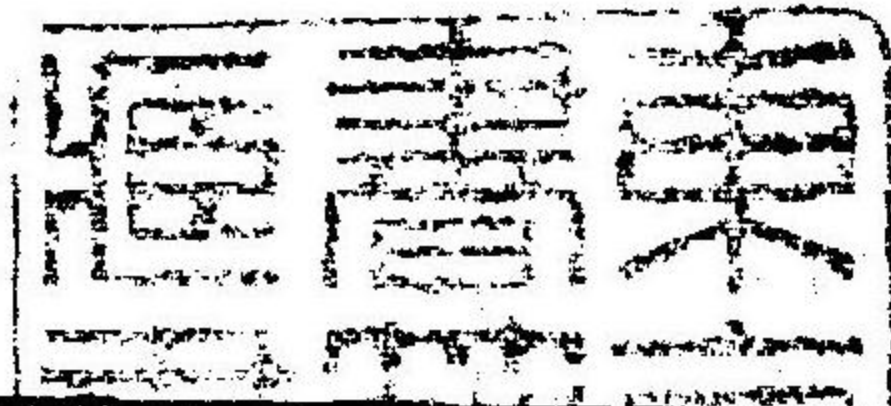
然るに我知らん乎聊の爲る
其端不書はと云つて事

こころ多言年之存北九月

野口貞歳



片桐重厚書



芳香
餘談

一葉廻風卷之一

東京

瓜生政和編集

○日吉のそと

豊臣秀吉幼名と日吉とす日吉の継父筑阿彌の織田
信秀の僕たり病ひと得て故園の家へ歸り耕作す
と勉めしを元来家貧く日吉と養育と能はざり
邑の傍あり光明寺の和尚み頼と日吉を僧と爲んとす

日吉時ひよしとき十歳じゅうさい材さい機き勝かちれ志こころざし一ひと大おほのおほくく林はやし經きやうと讀よみを
 と教しよ皇みかどもも覺おぼえんと劣する念ねんなく人ひと歩あ集あひ武ぶ田でん上じやう杉すぎ
 今いま川がは北きた條ぢやうぢやう多おほくくふく戦いくさ争せうありありとと噂うわさととすすねね頭あたまを傾かたけ耳みみ
 を倚より是こゝととききととり一日いちにち慨げん然ぜんととくく歎なげトト曰い僧そうののま
 乞こ巧くわうのの稜りやうみみひひくく一ひと大おほ丈ぢやう夫ぶととるるものもの乱みだれれるる世よのの生うれれ出いだ
 安やすんんどど乞こ巧くわうとと學まなんんややとと是こゝよりより樹きみみ拳こぶしりり犬いぬとと逐おひ
 意いふふ仕ませせてて技わざがが狂くるふふののままかかくく人ひととと諍あらら論ろんとと仕し出いだ
 之これとと擲なげげ看みるる一ひと早はやくくそのその場ばをを逃にげげるるなどなど行なひひ暴はつつと

極きよくめめけけばば和わ尚しやうもも持もちちあありり日ひ吉よしをを筑ち阿あ孫そんがが許もとへへ帰かえん
 ととはは笑わらふふ於おてて日ひ吉よしのの繼ついで父ふのの怒いらりりのの遇あいいひひとと恐おそれれ大
 りり叫こゑびび罵ののりり果はつつてて我われをを逐おひひ家いえにに帰かえりり我われれれ火ひと
 放はなちち寺てらとと焼やきき捨すてて和わ尚しやうもも諸しよ化けもも悉しよくく擊うちち殺ころさんと
 斯かのの如ごとくくななまま僧そうららのの日ひ吉よしがが暴はつつをを憚おそるる事ことをを詭ま言ごひ
 言こと辞ひりをを昇のぼりりとと衣い服ふく筆ふで墨すずりのの物ものをを與あへへ漸やくく小
 日ひ吉よしととそのその家いえにに戻かえりりてて筑ち阿あ彌あとと是こゝとと商あままのの
 家いえにに入りいりり丁ちやう雅みやびとと劣するる日ひ吉よし至いたりりてて皆みな數かず月げつありりて

去る農となり工となり亦高となり尾張と美濃の間と
行く奉公住す日吉十六の歳遂に遠江に往く今川の
旗下松下之綱が家の僕となる之綱その奇才と愛し
日吉と改め與助と名け事ある毎に是と使ふ一日之
細話の席に同ふ汝の尾張の人か事を定む知るべし
織田家へてい如何様か鎧を用やと與助對えり
天下の人の鎧も桶皮なり織田家の獨り明園は
りちも膝の折か腕のたてた意の侍なりと云ふ之綱

合点我もこれとすり故に豫て明園一領と求めんと思
ふの念あり汝我が為に往て是と買来らんや與助許
諾直に尾張に往き道々ありや之綱が城主
て共計り不足らば如く早く織田氏に仕んふは
以り叔父に言入叔父も亦是と可くして勸む此時信
秀すでに没し信長世と嗣ぎ四方を攻めとて威勢
益んたり與助りや心と決して以る信長に非ざるに
共し功名と成す不足者なりと愛小於て支度と



調へ自身姓名と作つて
 木下藤吉と名のり信長
 の他に出ると胸の道の側
 りふ跪き謂して曰臣が父
 筑阿彌なる者先君信秀
 公の奴僕なり然れどもその
 とと臣のまじと幼稚して他
 の地にお在りまは筑阿彌

跡と継ぎ君が御門下にお仕ゆを能はざりし願ふ君ま
 臣として奴僕とかりし人多くと信長藤吉と見て笑つて曰
 汝が顔よく猴に似しとてその心必ず敏捷かると則ち
 召抱て奴僕となす是よりして汝が常にお信長の草履
 と誅して従ふ信長藤吉が筑阿彌の子らとて以て呼ば
 小筑と云ふ者奉仕して其勤めをうけんと厳なり一日
 信長曉と侵して他にお性んと早く玄關へ出ると供ま
 へりの者未だ到らざ一人お若吉のま在りて是にお従ふ

かの如きと批数回うけしは信長をこれと親と愛す
 秀吉の行状をとり放逸无頼ありて身と修めざる
 りのふ似たり故に世の童子らをもあつと慢りふ
 大言と吐き咨ぬ暴と働くを以て英雄豪傑の
 する所と思ひ謬あり秀吉の如し大志あり農工
 商の道へ意あはれ故に松下之綱の僕とぬ
 昔時けりて是と探ふその機共謀ふも早に
 今信長は仕へ初めて實心と頭へ一夜半ふ

寝風ふ起効強困苦して奉公ぬ効むて初り如く後世
 天下の權を掌握するの基本を愛ふあらん可く
 思ひ察して可かん

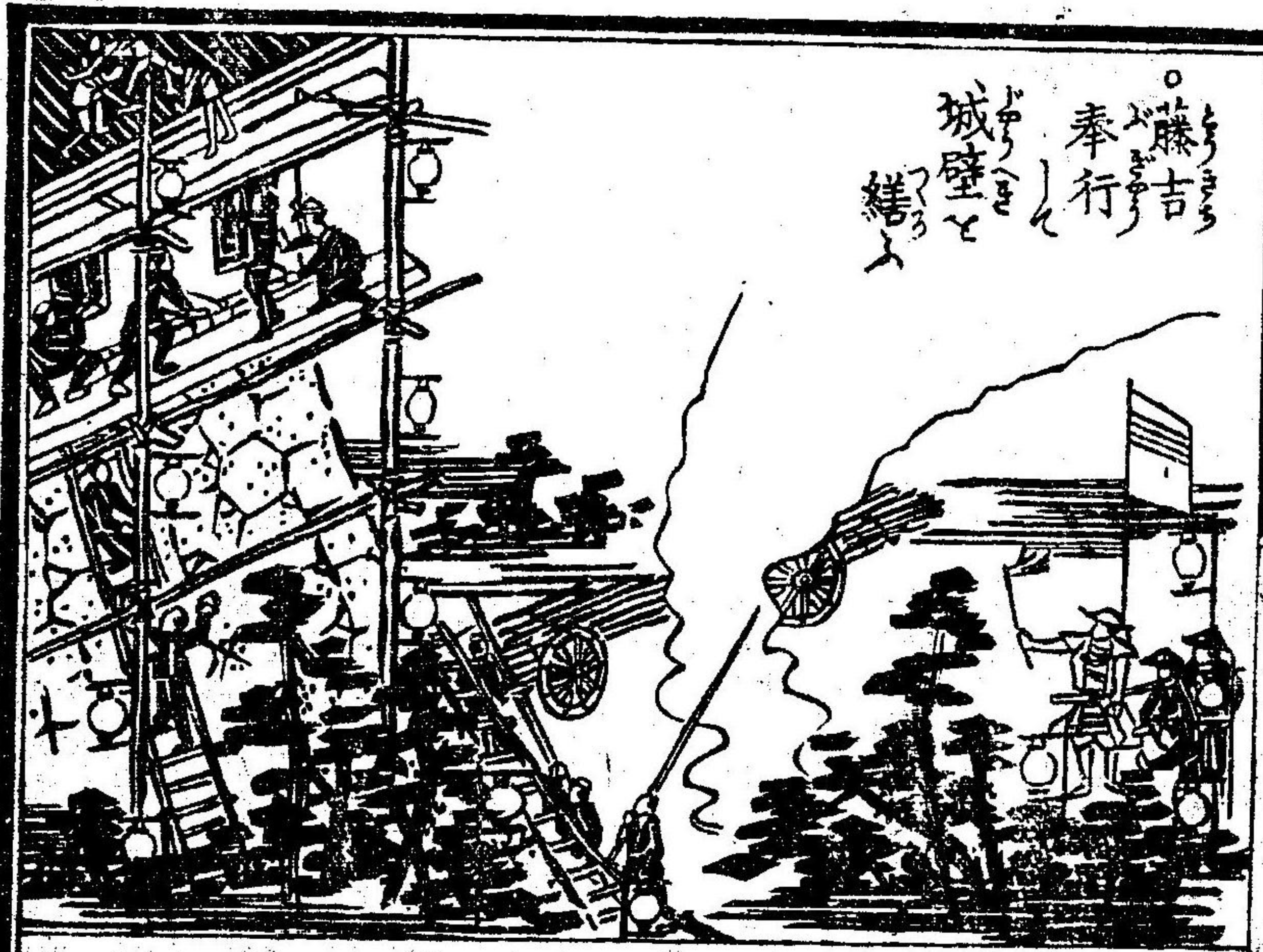
斯く我の翌年信長の居所を清洲の城の壁壊れ落すと百歩
 たり搦りの役人大工左官より損ト補りぬ月と越れ
 ともぬらば友吉信長に従ひ城下を過ぎんと去り仰ぎ視
 へ欲トて曰味危いふと信長徹うぬ是と支き友吉と顧り
 と小筑汝何ぞ搦語友吉左右ぬ洩んとと睥り敢て答へ

信長伴り怒りその手を拉りひき毛と近く藤吉す
 ち方今あん必の東今川武田あり西齋藤淺井六有
 り日々皆隙を窺ふ然ふかひの如く備と弛めて安閑と
 有る有司たる者の致しかる君の為に謀りて不忠ふわ
 ずやと信長愕然として是に服し歸り藤吉を召し
 てその城の修葺して汝に司らしめ速くこれに致せし
 藤吉拜謝して請諾直に重役の家に入り主公今日僕に
 命じて作事と司らしめたる願ふ職方の者と諭して

僕に指揮と聽んてと令しなれど然れども重役のその
 是と勝み頭と振り否吾が後とともみ非ず子宜しく
 自身をせとさふ愛ふ故て藤吉職人らとそく夜所ふ
 招ぎ集め君の命をよと以て酒と飲せ食とすり食
 應に多入歩と十隊ふ分ち一隊と以て十歩の修葺と請
 合せ自身より先立て是と奨励し降間を促し
 たぐけを普請二日の間ふ忽地なる信長適獵ふ
 出で歸るふのぞと是を見て大いふ驚き候奴果し

工 能するて初め如くして家禄と増加へ賜ふ秀吉ま
いひける板清洲の城中水も乏しく城を小牧
山に築き多くと信長もまゝ軍てその事を思ふと久
ども民を多く煩へんことを厭ひ歩過ぎ居たり然る
今秀吉が水とを以て諸人の歩んことを憚り是
と叱り命を受ずして直に存意を演べ万人の勞を引
出さんとす其罪まき死に當るべし然れども此度
宥すありと凡秀吉顔と叱りて策を献ずると屢

かり信長常ふこれと叱りて受ず故に見る者少き威
誇り笑ひて其人被が面の皮の厚きと十重ねたる鉄の
鐵の勝れりと然るども後をりて熱の色なく忠を信
長に容んとと思ひいとかん
支那の趙襄子と云ふ人あり孔子の問ふ先生諸
人の往き其君の見ゆると七十人のふよんと叱り然
れども止らずして去る仕わざ明君と云ふ或は先主
の道の人を通ぜざらうと孔子對ず異日襄子于路



藤吉 奉行 城壁と 繕ふ

ふらふらさまの目先生の内ふ
道と以てまことの先生對
へず知って對へざる隠す
かり隠せば真仁なること得ん
若し信ふ知らざるが聖と為
るふとんと子路の曰天下
の鳴鐘を建てこれと撞ふ
杖と以てするときは豈能

その声と発せんや君先生の内ふ猶杖とをりて
撞くと夫人として放逸暴行をば人の杖とをりて
鐘ふりて撞く声ふれ鐘の用ふ當らず秀吉も
め元頼信長も仕へて始りて勉強出陣も
信長撞ふ撞木とありて秀吉の大鐘声を發
すとふふふふ

○毛利松壽のそと

元就とめの名と松壽とふ松壽幼雅より器量凡



年十二歳の是を奇しかり亦
 その志の大いなるを感ぜり
 後果して山陰山陽十六
 小將して四海を併吞する
 の威勢のふりなり
 松壽椽楫の城の在り
 とき大明の使者京
 都に来聘をせんとして

其路藝及吉田を經る

吉田の松壽が父毛利弘元が居城なり

此とき明人のうち小能人の相と觀る所のあり名成
 朱良範と云ふ松壽往て良範のあり良範は
 て多公の是漢の高祖と唐の太宗の相と兼
 り後必ず威を四方に宣んと松壽元服して元
 就と名り少補次郎と稱す生質音吐洪なり
 麾下ありて士卒へ号令を下す其声諸隊

一時元就左右の侍する人々の問て云く我を往昔
 の大将と比較せば誰の當らんと一の儒者あり奉
 せ進みて對て多し君が仁徳君が武勇を以て考ふ
 わが周の文王或ひは武王の比多しと元就云ふ
 笑き答ふ笑ひ吾すまひち今文王武王の及むざる
 を為るなり文王武王の臣下は豈汝が如く阿り
 諂ふ者ありんやと云ひとなん

○ 武田勝千代のはあ

天文五年十一月武田信虎兵八千を率ひて信及ふ討
 入り平賀源信が楯とりりる海野口の楯と圍と攻
 りと二十四日源信堅く守りてこれと技と能はず然
 りふ日ふひく新年に近げき雪まゝ大いふ降出けし
 信虎長く在陣を難きことと計り城の圍とを解
 して還り勝千代時ふ十六歳今年元服して晴信
 と父信虎が軍を解て歸りふあり自身殿をせん

益かろんを然れども晴信強てこれと乞けり故兵三百
み將として晴信殿と為さしむ爰あつて晴信総軍
不後うそに入里晩ふふんや宿す雪すんく降晴
信親その兵を警めてさし甲を釈て勿れ鞍と卸ま
とかり馬の草かひて後各砲すや食すべし丑の
刻ふふら出陣しとせん唯吾が術よとろふ隨ひまれ
と是とすま兵士も竊ふ笑つてさし風あれ雪降る

とかり如し何の警もろ有んと既ふ丑の刻ふかつとす晴
信宿を發し道と還して海野口ふ向ふりの三百騎雪と冒
し馳城ふふら夜未どあけず城將源信らの時すてふ
部下の諸將と散れ返して僅百人の兵士と城ふ止む晴信
兵と三隊ふけ自身一隊と率ひ城ふ攻入り二隊の城の
外に残り幟と揚鯨波の声と發して之の應ず城兵の
晴信ヶ人数の多少と矢下發けを戦ハザして愈道
愛ふあいて遂に城主源信と討ち城すやふ落

階たかより然さと心こころ人ひとと晴は信しんが行ゆ策さくの奇き多おほふ敬あやま諸しよ將しやう
 の心こころもめて暗くら信しんは振ふるすのの色いろあつて後のち晴は信しん
 武田たけだの家うち跡あとと續つづ諏す訪ほう頼たの茂しげ小こ笠かさ原はら長なが時ときと戦たたかひて
 勝かち利りと得えるふあつて心こころややく橋はしり色いろ小こ溺おぼれ酒さけふ
 耽たふりて政せい勢せいと顧かへりて唐たう詩しと賦ふまるを好このむ
 詩しと作つくる僧そうと集あつめその會かい與よの情じやうふあつて内うち
 小こ難なん事じあつて老らう臣しんあつて役やくの者もの急いそふと謀まる
 とあつてと欲ほするも進すすむ見みゆると免まるる君きみ一ひと法はふ



述たくしたの忽たち地ち怒いかり小こ觸さふ
 恐おそれ放はなす之これと練あるのの時とき
 時ときは板いた垣がき依より形かたち疾はや病やまひと称なづ
 して勤つと仕まとひき潜ひそみ詩しと
 作つくる僧そうと我われが家うち小こ近ちかへ日ひ
 夜や詩しと為なるを学まなぶと
 小この性しやう未ま分わて文ぶん事じふ

宜く早く臣と斬りて是も早く命と君も捧る
かり馬で必ずしも戦場不在りて冠と死まるの忠
と謂んやと暗信とと交き教と怒らば信形か
引卧内不入り涙と隕して謝して早く我をんぞ過
失と改めざらんやと固て誓ひの書とあり信形も賜
ふ時ふ暗信年十九なり

往昔支那ふて吳の國王荆の命と伐んと欲し
左右の人々も命令と下りて此度の出陣と練る

りのあが必ず殺すべしと時ふ家臣も少孺子と云
ふるなり諫言かんと為れども敢とせざらんを懐き
弾と操て王宮の後方の園も出て遊ぶと三朝
露との衣裳と沾りて呉王とこれを見て怪んで
子何の故もかくの如く衣服と沾りて苦むと
孺子對て早く雲の中の樹の上も蟬あり高きと
ろふ居て声あはれも鳴き露と欣む螳螂の後友
ふ在ると知らば螳螂身と委ね首とりてげて

蝉と取んとして雀の傍に在ると知らば雀頸を延
 べ燈螂を啄んくして臣が彈丸と持ち木の下の
 在ると知らず此三のりの皆務めて其前の利を得
 んと思ひ手後方小患へ有ると顧ざるなりと吳王
 ととて嘆き善哉子が譬言とて教ふ其と出す
 とを羅く孺子が吳王に於る信形が晴信に
 於る直み諒めて採用らるることを知り或ひの物
 比へて談話を設け或ひの是と言んとして詩と

学ぶとど忠士の心を用ゑるの如し
 晴信酒と飲と色小濁るの獨り必政と怠るのとかなだ
 養生訓に酒の天の美祿なり少く飲め陽氣
 と助け血氣と和らげ食氣とあらしむ愁と去り興
 と発してくあはれ人の益あり多くのあはれ又よく人を害
 す酒の過る物も水火人と助けてよく人小
 災いあるか如くと云く
 又酒の飲め各人小よりてよた程の節

かり少一のわが益めなく多くのわが損多し性謹と厚
 き人も多く飲を好めを貪りて足若く平生の
 心と失まひ乱れ及よ言行も非狂者の如し身と
 顧りて懐むべし若き時より早く入り足て自ら戒
 しめ父兄も早く子才と戒むべしスーくたうを
 性となる癖あ成りて一生改まらざるなり
 又色慾と懐むと人の部は腎の五藏の本と云り
 然るに養生の道腎を養ふると重んずべし

腎と養ふと兼補を頼むべし只精氣を保ちて
 へらさば腎氣をあさめて動うすべしだ 論語曰若
 き防の血氣方不壯んより之と戒を色ぬ在りと
 聖人の戒を守るべし血氣盛んからし任せ色慾
 とりいさふすを必ず先禮法とすむき法外と
 行ひ恥辱とえく面目とより入るあり時こそ
 後悔まきども 甲斐きあて後悔うつらんと思
 ひ禮法と固く懐しむべし 況て精氣と費や元

二葉 卷一

三種
五匹
鏡上
四



死とつらなる寿命と短く
する本なりあやう若き時
男子の欲ふくいて精
氣と多くあつたる人を生
付盛んかきども下部の元
氣すくなくあつ五藏の根
本よくくいて必ず短命なり
眩むべし

又男二十歳前より血氣いまだ賢固ならず此内
交接して屢々精と洩せば元氣へりて病痢を生
トすの人愚鈍ふなると久れ信形ハ疾くらの理
とも知りしるう

○上叔虎千代のまゝ

景虎幼名と虎千代といふ虎千代歳十三のとき父
為景越中と征せんくいて敵の謀計に落入り梅檀
野に死す時天文十二年なり爰に於て兄晴景

家跡と續ぎその才景康景房と殺し虎千代と
 殺さんとす虎千代走つて門に至る門を護る者
 やく之と床の下に匿し日暮る速んで出逃さんと
 する不熟く眠り居りけり人その大膽なる不敬
 喚起して潛み走らす爰に於て虎千代一人春日
 山の寺へ往し不寺僧ら之と伐んとす故に逃て
 椽尾ふ走り乳母の夫なる本莊慶秀が家におり
 慶秀宇佐美定行と謀計とありせ心とそし虎

千代と保護たり

定行の上杉氏の一将好書と讀み天文兵法不

通ず景虎より人と以て補翼とす

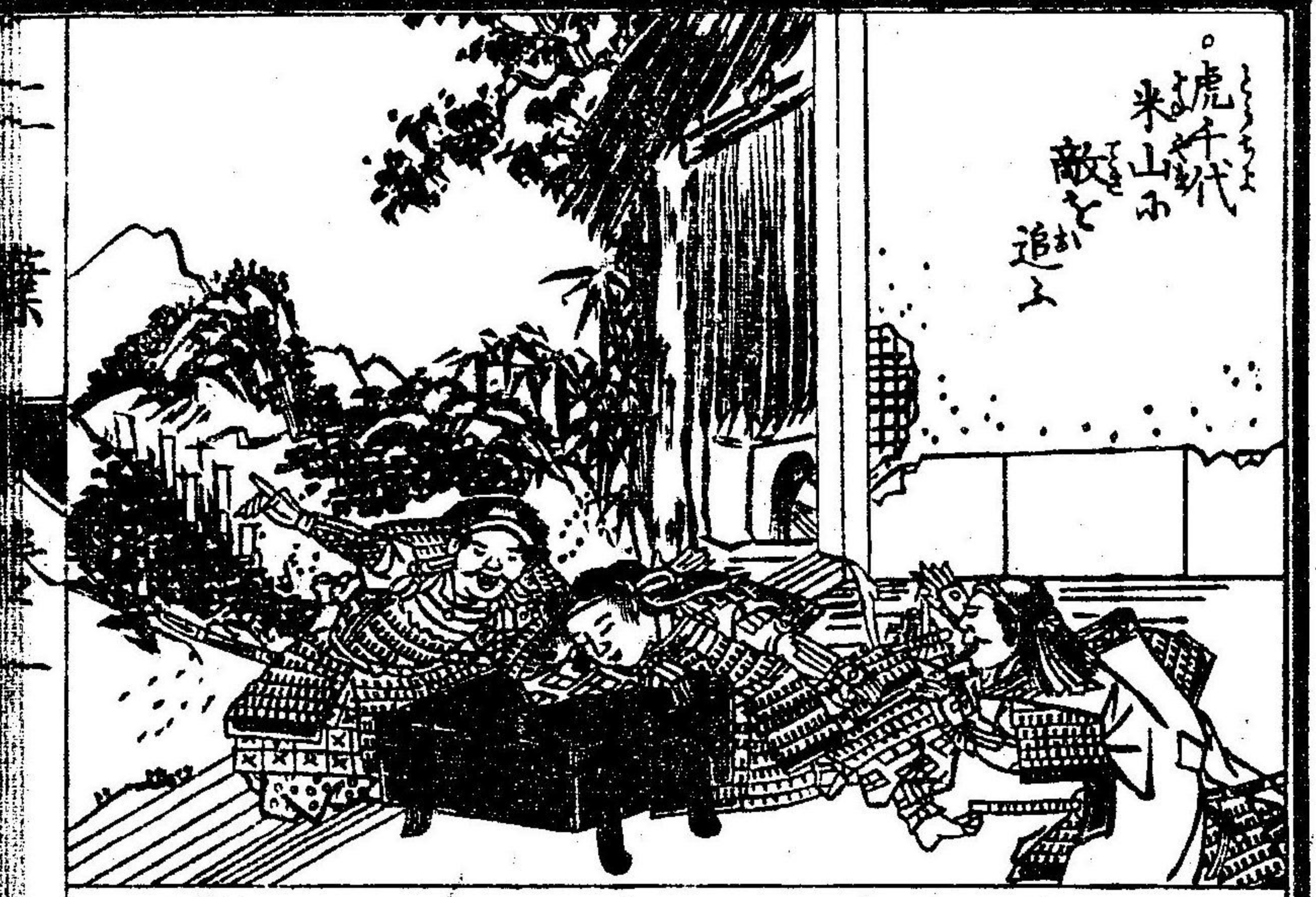
然れども晴景人ごとく虎千代と尋ね求むるに嚴
 ありけとを虎千代とれと避て本莊が家を出が
 十四人の士を従ぐ何れも行脚僧の姿ふりて
 頭陀と撰草鞋とをき往て米山の峠におり
 とき虎千代頭とめらる府内の城中と瞰み視て

吾他日兵と起して必と復せんを必ずさし陣と布べ
 と夫より父爲景が討れざる梅檀野にあり涙を流し
 その灵と拜してその兒を仇敵なる者らと斬り以て
 幽魂と慰め奉らんと彩て北陸東山の諸必と遍歴
 一あまわく山川の模倣と見且城地の形勢とを圖
 寫して持ち帰り時ふ人ありて此事と晴景に告
 げを晴景討手とわけて捕へんと虎千代をやく
 慶秀定行らと謀り兵と起し旗と揚げ椽尾と

の城で修覆してとちの據り上杉定實の旗下不属す翌
 年春長尾俊景黒田秀忠ら兵と將ひて未り攻む虎
 千代防戦して大り不是と破り敵將俊景と斬る秀
 忠敗走すかくて後晴景に軍と出り攻未ると
 づとちも我ふ毎に虎千代の軍配あふり勝利を
 ずとちも晴景まゝ長尾政景と將となり大挙
 一未つて椽尾とせし定行出く戦んとす虎千代時
 未十七歳椽尾上りこれと望と見てその敵兵遠く未

一
 二

三十一
 三十一
 不輜重かろなり必かならず久ひさく苗なまづ彼かれら引ひ去きんと
 すると疾はやてこれと撃うめり如ごとく夜や半はんありて政まさ
 景果かく兵へいと揚あげて帰かへり虎とら千代ちよより三さん千せん騎きを以もて
 門かどと突つき突つき出でて政まさ景かと下しも濱はに戦たたかひと進まりやあり追お
 討うちく米山よひやまの篠しのぶよりと兵へいと止とめて動うごう故ゆに
 小嶺こみねと越こえと吹ふき鼓つづみと鳴なり兵へいと進まり退ひき撃うちて又また
 大おほいふ之これを破やぶりし時とき定さだ行ぎやう諸將しよしやう將しやうみむひて多おほく諸
 君きみら我われが君きみの兵へいと接あへ止とめり故ゆに命いのちを命いのちに知し



三十一
 三十一
 らずと定さだ行ぎやう多おほく敵兵てきへい逃にげ山
 の險けん岨しよに迫せまりし味方あじかた急いそみ
 これと追おひ彼かれ必かならず半はん夜やより
 返かへり撃うちんが時ときに故ゆに
 上うより嵩かさみかき味方あじかた下した
 ありて是これを請うかひて
 難なんえんがん多おほくりつ
 敵嶺てきみねと越こえ下したり坂さかみり

味方高きより之を撃つ支ゆと能ハザレて倍走
 ん君年少しとりども 穢ふ臨ミ変ふ應レて兵と
 用ちる形の如し豈と我ガ輩の企ふより所らんや
 と爰ふ於て政景ふ降り晴景自殺して虎千代府
 内の城ふ入り景虎とより翌年村上義清高梨政頼須
 田親満島津規久ら武田晴信のより信忍と逐ま
 越後ふ逃入り景虎ふ謂レ願ハ君ガ英武の鋒さきと
 借り必ふ帰るいふゆりて 前の日の訥と雪ざりと

之けを景虎は十八歳とれふ對てらん我ガ父前年
 越中のふなる梅檀野ふ戦ひ死す故ふ北ふ先考の
 怨かり然らふ父の讐ふ報ひずりて徒ふ天と戴く武
 門の道ふ兆ずると以て雪の解と待て兵と越中ふ
 出レ父の仇ふ報んとふらん然れども公ら今晴信ガ爲
 領ふと奪ひ掠られ幼弱微力の吾とれむら時ふ
 方つて吊ひ合戦となり公等とて本ふへ還らしめず
 んバ勇士の義ふあらずと 則ち越後の兵士八千除人

へてまの公の義清と助る真の高義と為らん然りと云ども
 晴信いも死し公いも志と成すて戦はん茶一戦ひと
 決せんと思ひ公より兵と進め来れと景虎諾し明朝兵
 と出いて戦はんとすやも双方固く期と約し景虎即時
 小令と下し総軍七隊と合いて圓備へと為し夜明すと
 待つ陣と操出し橋と渡つて進む晴信はへと十尺戻
 り分ちこれと迎へて戦ひ卯の刻より始まり未の刻に
 至れども橋と中へく逐ひ上り逐下るも勝敗りまじ

決せず景虎ひも兵と合し川上より渡して甲及勢
 の後方へ出づ甲軍これと見て急み後陳の兵と振り
 りけ前後の激戦とみ烈しく甲及方横田源助板垣
 三郎かよ駿馬より加勢の七将を悉く討死し越
 後の兵士も死傷を多し景虎晴信の陣の堅
 固なるを見て破るるを知らず自身指揮して兵
 と越後へ還しけも暗信もこれと追はず供し兵
 と引て帰るも甲越戦争手とりめの第一魁

あざあざりける

永井氏より孫子の曰く之と作して動靜の理を知
 り之と争つて有餘不足の計とを知り今や景
 虎暗信と始めて戦ひと合す敵の勇怯その智の
 賢愚をかり多と察し初るふ多とを深く戦ひて
 挑み争ふべからざるの時なり景虎をふあつて鉄ん
 や共に進むとと放きみせず少くこれと試む
 るのこめて斬ち兵と退く孫吳を謂所始めて

戦ふの道と得たりと謂べし然れども男たるその
 人の為ふ頼まれ寇を撃つ身命と投うちて
 するは常とかな況んや景虎年いきと二十ふ至
 らず義清の為ふ請起され境を越へ兵と交ふ
 於てあや然るふりきと雌雄と決するふあらずん
 軍と還すの愧恥ざるふあらざるも寂み謹一むの
 志と専りて他の誹謗と顧りてんその動靜を
 偵つて計どの得失と定む謂ッベし時ふ勇んで



○兩雄相争ふ

遇つて勿の将ありと志を
策畧尋常ふあはざる事
初る一惜多景虎後年
晴信の為ふ詐り物と
一旦の怒りふ生得の短
慮を發し兩面相睡ひ恥
るふ兵と純く一軍を
費や一三十五年の兵力

八羽の向ふ縮背なるもの鳴是誰か過ちぞやト

○龍武丸のくま

六角義郷の男氏御幼雅名と龍武丸と多し龍武丸歳
のとれその臣磯野善兵衛と多るりの月日星の三光を鳴
鶯と捕へ美しき籠み入れくを呈しけを龍武磯野
が帰しあてふて言るや善兵衛が我ふ慰めして贈り
志の嬉し然りと久しも故なきふ人と捕へ是と牢圍み
入れ置き謠をど唄はせてすめ異をばさる黄鳥と

15
3
4

二葉の風一終

竹のまゝ梅の雪かどふ抱び居ておのこし鳴らる面白
けれ籠の内ふ飛く外と思ふ歎きの声と少き何ふ
せうんと遠く是と放さるしとなん

